

日本におけるデザイン史研究の現況

—意匠学会第55回大会シンポジウムを手がかりにして—

An outlook on the Japanese design history of the Heisei era:
Indications as presented at the symposium held at the 55th annual
conference of the Japan Society for Design in 2013.

天貝 義教

AMAGAI Yoshinori

After the end of World War II, Japanese design studies and design history were mainly promoted by the Japanese Society for Science of Design (*Nippon Dezain Gakkai*), which was founded in 1953 and published the Bulletin of the Japanese Society for the Science of Design, and the Japan Society of Design (*Isho Gakkai*), which was founded in 1959 and published the Journal of the Japan Society of Design. From the 1990s to the 2000s new societies appeared in Japan to promote design history. The Design History Forum (*Dezain Shi Foramu*) was founded in 1998 and published the Design Discourse, and the Design History Workshop Japan (*Dezain Shi Gaku Kenkyukai*) was founded in 2002 and published the Design History: the Journal of the Design History Workshop Japan. The newly founded societies make a worldwide contribution to the design history profession by not only publishing many journals and books in Japanese and foreign languages, but also holding many international symposiums and conferences on the history of Japanese design. The Design History Forum published especially a book titled *A History of Japanese and Western Design: Exchange and Influence* in 2001. These societies are the new driving forces behind the development of design history in Japan of the Heisei Era.

1 はじめに

平成25年（2013）7月20日から21日にかけて福井工業大学（福井県福井市）で開催された意匠学会第55回大会において、「デザイン史をどう教えるか？」というテーマのシンポジウムがもたれた⁽¹⁾。

デザインに関する全国的な学術団体が、大学・専門学校などの高等教育機関レベルでのデザイン史の教育をテーマとして集中的な議論をおこなうのは、日本デザイン学会が平成元年（1989）に、学会の機関誌『デザイン学研究』第72号⁽²⁾において「デザイン史研究の現況」と題した特集を組み、日本、ドイツ、アメリカ合衆国、英国におけるデザイン史研究の動向が報告されて以来四半世紀ぶりのことである。

この『デザイン学研究』第72号の特集に阿部公正氏が寄稿した序文の表題は「デザイン史の確立に向けて」となっており、その末尾では、デザイン史の基礎概念の確立が要請されていた。このことから、1980年代末の当時の日本においてデザイン史という学問分野がまだまだ明確に確立していないという認識があったことがうかがわれる。これに先立つ1980年代初期に、阿部氏は、工業デザインについて、「工業デザイン史をすでに確立されたものとして語ることはできない」と指摘しながら、その通史を叙述しようとしたが⁽³⁾、それは、デザイン史をひとつの学術分野として確立しようとした重要な試みのひとつであったといえる。

今回の意匠学会大会シンポジウムには、『デザイン学研究』第72号において、「アメリカ

におけるデザイン史研究の展望・1948-1988』と題した研究発表をおこなった藤田治彦氏、「ドイツにおけるデザイン史研究」と題した研究発表をおこなった藪亨氏の両氏が、事例報告と討論の主要パネリストとして参加しており、「デザイン史をどう教えるか?」というシンポジウムのテーマは、1980年代末から2010年代の今日までの日本におけるデザイン史の充実した発展とともに、その学術分野としての確立をしめしているといっている。

その一方で、シンポジウムの資料ならびに討論を通じて、日本ならびに世界のデザイン史に関する通史的な教科書の問題がクローズアップされることとなった。一例としては、すでに文部科学省著作教科書として高等学校生徒用のデザイン史の教科書⁽⁴⁾があるのに対して、大学レベルの学生用のデザイン史に関して、日本語で書かれた一般的かつ包括的な学術的教科書があるのだろうか、という疑問についての活潑な議論があったことが指摘できる。

シンポジウムの資料によれば、大学・専門学校レベルでデザイン史の講義を担当する意匠学会会員の多くが、平成17年(1995)に美術出版社から出版された阿部公正氏の監修による『世界デザイン史』⁽⁵⁾を教科書もしくは参考書として使用している現状が明らか

になった。この書は、平成16年(1994)にBT美術手帖3月号増刊⁽⁶⁾(図1)として発行されたものが単行本化されたものであるが、監修者の阿部氏は、その冒頭の文章で、この書を契機にして、「デザイン史やデザイン理論の記述が活発になることを願う」と記している。高等教育機関で使用するためにデザイン史の教科書をめぐる議論の活潑さは、阿部氏の願いが今日の日本において相当程度実現していることの証左といえよう。

本論では、こうした意匠学会第55回大会シンポジウムでの議論を手がかりにしながら、平成元年(1989)以降の日本のデザイン史研究について、第一に学術的組織の動向の概略をしめし、つぎに明治期から平成期まで通史的な観点からとらえた研究図書の主要なものを概観し、最後に、以上の概観をふまえたうえで、日本デザイン史についての筆者のアプローチを提示して、日本におけるデザイン史研究の現況の報告とする。

2 平成期のデザイン史研究の国際性

日本における組織的かつ系統的なデザイン史の研究は、昭和28年(1953)に設立された日本デザイン学会(Japanese Society for Science of Design)と昭和34年(1959)に関西意匠学会として設立され昭和53年(1978)に現在の名称に変更された意匠学会(Japan Society of Design)との二つの学術団体を中心にしてすすめられてきたといっている⁽⁷⁾。いうまでもなく、デザインの歴史についての記述は、デザイナーやデザインされたものごとをめぐって、個人の回想録、企業の社史、国家あるいは自治体などの公共機関による制度史、博物館での展示とそのカタログなどをふくめて多種多様なものがある。そのなかでも、日本デザイン学会の学会誌である『デザイン学研究』と意匠学会の学会誌『デザイン理論』に発表されたデザインの歴史に関する論文が、学術分野としてのデザイン史の記述の中核となってきたといえよう。両学会誌の論文は、デザイナーやデザインされたものごとに関する事実の多様性や複雑性を単に追いかけることにとどまることなく、それらを何らかの方法によって理論的に整理し理解する



図1

という学問的な要請に、具体的には査読という手続きを経て、こたえているのである。

こうしたデザインに関する学術団体についてみれば、平成期においては、とりわけ、西暦2000年前後にデザインの歴史 (history of design) を主たる研究対象とする「デザイン史 (design history)」をその名称に冠した学術団体が複数設立されたことが特筆される。ひとつは、平成10年 (1998) に設立されたデザイン史フォーラム (Design History Forum) であり、いまひとつは、平成14年 (2002) に設立されたデザイン史学研究会 (Design History Workshop Japan) である。

デザイン史フォーラムは、平成23年 (2011) 以降、意匠学会と合流し、その国際交流推進部門⁽⁸⁾ となっているが、この二つの学術団体の特徴として、デザイン史フォーラムの機関誌『Design Discourse (デザイン史論)』ならびにデザイン史学研究会の機関誌『デザイン史学 (Design History)』で発表される研究論文がデザインの歴史研究に特化されていること、さらに、両学会の研究活動が、設立当初より、国際的であることが指摘できる。

世界的にみれば、「デザイン史 (Design History)」⁽⁹⁾ という表現を名称に冠した学術団体としては、昭和52年 (1977) に英国で設立された Design History Society (デザイン史協会) が最も古いとされる。このことから知られるように、デザイン史は、他の関連する学術分野である美術史・建築史にくらべて非常に若い学問だといわれる。英国の Design History Society に比較すれば、平成期の日本で設立された二つの学会は、活動期間に二十年以上の差があるものの、設立からの活動についてみれば、その国際性において、Design History Society に比肩しうるといってよい。

一例として、筆者が非会員として研究発表をおこなった平成17年 (2005) にロンドン首都大学において開催された Design History Society の定期大会 (Annual Conference) には、意匠学会ならびにデザイン史学研究会の会員が多数参加し、研究発表をおこなったことがあげられる⁽¹⁰⁾ (図2)。こうした海外の研究団体との研究交流を、学術団体として組織的かつ継続的におこなっていることが、こ

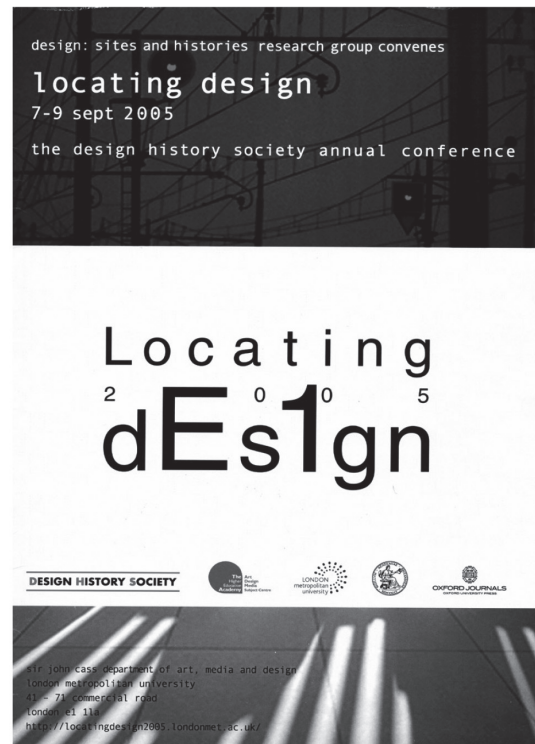


図2

れら二つの団体の国際性を特徴づけているといえよう。

デザイン史フォーラムは、デザイン史の国際的な研究を主要な課題として出発しており、平成11年 (1999)・平成12年 (2000)・平成15年 (2003) にデザイン史の国際的な学術会議として、国際デザイン史フォーラム (International Design History Forum) を開



図3

催している。平成13年(2001)に発行された『国際デザイン史：日本の意匠と東西交流』と題された論文集⁽¹¹⁾は、平成11年(1999)と平成12年(2000)のフォーラムでの研究成果を中心にまとめられたものであり、30名を超える執筆者による論文は、明治維新前後からの日本と欧米諸国とのデザイン交流の歴史を国別に通史的に概観したものとなっている。

この種のデザイン史の記述は、一方向的な受容と影響関係の安易な沿革史的な記述になりがちであるが、この論文集は、双方向的な国際交流という観点にもとづいた、新しいデザイン史の記述のありかたをしめしているといえよう。

デザイン史フォーラムの国際的な活動として、デザイン史デザイン学国際会議(ICDHS: International Conference on Design History and Design Studies)との関係を見逃すことはできない。

ICDHSは、最初の会議が平成11年(1999)にスペインのバルセロナで開かれて以来、ほぼ隔年ごとに非英語圏において開催され、昨年平成24年(2012)のブラジルのサンパウロでの会議で、8回目を数えている⁽¹²⁾。デザイン史フォーラムの代表者である藤田治彦氏は、ICDHSの設立当初より指導的立場(ICDHS Board)にあり、藤田氏のリーダーシップにより、平成20年(2008)には、日本の大阪大学を中心にして、アジアで初めてと

なる第6回目のICDHSが開催された。

筆者は、平成14年(2002)の第3回のイスタンブール、第6回の大阪、第7回のブリュッセル、第8回のサンパウロの会議に参加し、イスタンブール、大阪、サンパウロにおいて、研究発表をおこなった。イスタンブール工科大学での発表(図4)では、上記の『国際デザイン史』へ寄稿した論文をもとにして、デザインに関する日本の高等教育の発端について、明治6年(1873)のウィーン万国博覧会への日本の参同に関する日本とオーストリアの史料を用いながら、「美術」という日本語の意味と工部美術学校の設立目的をめぐって考察したが⁽¹³⁾、19世紀後半のデザイン教育のひとつの重要な事例研究として、アメリカのデザイン専門誌であるDesign Issues誌に掲載された⁽¹⁴⁾(図5)。明治6年(1873)のウィーン万国博覧会への日本の参同から、すでに140年以上の年月がたっており、また、慶応3年(1867)に開校したウィーンのクンストゲヴェルベシューレを模範にして、明治9年(1876)に応用美術の教育を目的に工部美術学校が設立されたと考えるならば、その差は10年ほどの違いでしかなく、日本のデザイン教育の歴史が、世界的にみても決して浅いものではないことが理解できるのである。

第6回の大阪での筆者の発表⁽¹⁵⁾では、明治初期、1870年代から80年代にかけての日本とヨーロッパにおける応用美術概念をめぐる

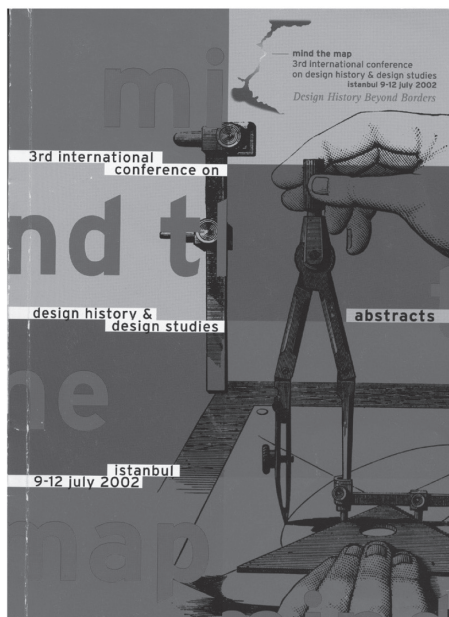


図4

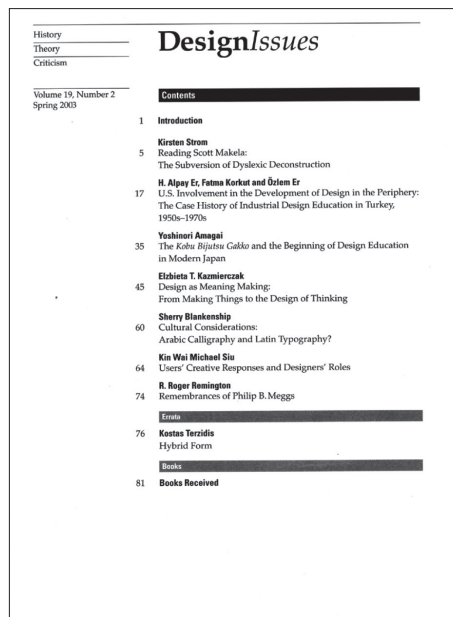


図5



図6

デザイン思想の交流に関して、ゴットフリート・ゼンパーやヤーコップ・ファルケらの応用美術の思想とフェリックス・カーニッツの装飾論が平山英三による翻訳を通じて日本へ導入されたことを歴史的にあとづけたが、これについては、スウェーデンの研究者から、19世紀後半のスウェーデンにおいても、ゼンパーやファルケらの応用美術思想が日本と同じように受容されていたことが指摘された。

第8回のサンパウロでの会議（図6）は、サンパウロ大学ならびにマッケンジー大学キャンパスを中心に開催され、筆者は、明治後期の日本における工業意匠概念が、すべての工業製品の美化を目的としたインダストリアル・デザインとして意義づけられていたことを、平山英三と松岡寿の意匠図案概念から明らかにした研究発表をおこなった⁽¹⁶⁾。この会議でも、日本から筆者をふくめてデザイン史フォーラムならびに意匠学会の多数の会員が参加して、研究発表をおこなっている（図7）。

デザイン史学研究会は、平成15年（2003）に、「21世紀におけるデザイン史研究」と題した第一回のシンポジウムを開催して以来、平成24年（2012）の研究會10周年記念シンポジウムまでに10回のシンポジウムを主催している⁽¹⁷⁾。そのシンポジウムの多くは、第1回の英国のデザイン史家ジョナサン・M・ウッダム氏の講演に代表されるように、海外のデザイン史家が招聘されるなどして、国内外のデザイン史の研究交流の場となっており、日本のデザイン史研究を広く国際的に位置づけるものとなっている。こうしたデザイン史学研究会の活動は、日本における国際的なデザ



図7

イン史研究のひとつの実践的なかたちをしめしているといつてよい。

以上のような国際的な学術会議、とくにICDHSへの日本人研究者の参加については、藤田治彦氏が意匠学会の報告⁽¹⁸⁾において、いくつかの問題点を指摘している。それによれば、ひとつは、全体的にみて、アジアからの参加者が少ないこと、つぎに、スペイン語・ポルトガル語圏の若い世代の研究者が英語での発信力を高めて日本の研究者との差が縮小していること、欧米の大学と日本の大学との学年歴の違いなどから日本の研究者、とりわけ若手の研究者がヨーロッパや南米などのスペイン語・ポルトガル語圏での会議への参加に不利な状況にあること、などである。

これについて藤田氏は、デザイン史研究において実績のある日本が中心となり、小規模でもアジア地域で定期的に国際会議を開催してゆくことの必要性を訴えている。筆者の乏しい経験からみても、内容の充実した国際会議の開催と運営、そして参加については個人的な努力には自ずと限界があり、研究者の所属する学会なり大学あるいはその他の一定の規模をもつ組織の日常のかつ継続的な支援が、今後の日本におけるデザイン史研究の国

際性を保つうえで重要となるう。

3 平成期における日本デザイン史研究

平成期の日本におけるデザイン史研究の特徴としては、明治期から平成期にいたる日本のデザインの歴史について、通史的におおきくとらえようとする研究図書が多数出版されていることが指摘できる。その代表的なものとして、平成元年（1989）に出版された出原栄一氏の『日本のデザイン運動—インダストリアル・デザインの系譜—』⁽¹⁹⁾（図8）があげられよう。これにつづいて、平成11年（1999）発行の藤田治彦氏の『現代デザイン論』⁽²⁰⁾、平成13年（2001）のデザイン史フォーラム編の『国際デザイン史』、平成15年（2003）の竹原あき子・森山明子の両氏の監修による『日本デザイン史』⁽²¹⁾、平成18年（2006）の長田謙一・樋田豊郎・森仁史の三氏の編著による『近代日本デザイン史』⁽²²⁾、平成21年（2009）の森仁史氏の『日本<工芸>の近代—美術とデザインの母胎として—』⁽²³⁾、そして同年の特許庁意匠課による『意匠制度120年の歩み』⁽²⁴⁾があげられる。

藤田氏の著書は、表題に「デザイン史」という表現は使われていないが、その内容は、デザインを、産業・生活・情報・環境にかかわる広い意味での技術を意味する芸術ととら

えながら、明治期から平成初期、いいかえれば19世紀後半から20世紀末にいたるまでの日本におけるデザイン論の通史となっている。また森氏の著書では、副題にみられるように、工芸をデザインの母胎とみなす立場から、明治期から平成期にいたるまでの工芸概念の変遷を探求するなかで、日本におけるデザイン概念の形成が取り扱われている。『意匠制度120年の歩み』は、意匠条例の制定から現行の意匠法にいたるまでの一世紀をこえる日本のデザインにかかわる法制度の歴史を概観したものであり、世界的にみても貴重なデザイン制度の歴史についての記述といえよう。

これらのなかで、出原氏の著書は、日本のデザインの歴史についての研究書として、集大成のひとつとなっている。またデザイン史フォーラムのものは、平成期以降のデザイン史研究の方向性を明確にしめたものとなっており、出原氏の著書とあわせて、平成期の日本のデザイン史研究の特徴をもっともよくあらわしているといえる。

出原氏は、その著書の「あとがき」につきのように記している。

「近代デザイン運動の歴史についての著作は、もう決して少なくはない。しかし、そのほとんどはヨーロッパおよびアメリカにおけるデザイン運動についての著作であって、わ



図8

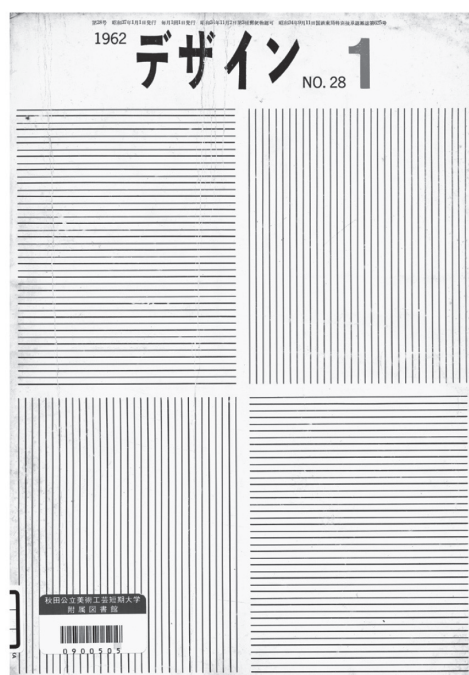


図9

が国におけるデザイン運動を真正面から取り上げた著作は意外に少ないのは残念である。」出版から四半世紀を過ぎた今日、出原氏の著書は、日本のデザイン運動を真正面から取り上げた代表的な研究書と評価できるが、その成立事情については、同じく「あとがき」から読み取れる。それによれば、氏が昭和35年(1960)に発行された『産業工芸試験所30年史』⁽²⁵⁾の編集に携わっていたところに、執筆が計画されたという。その後、昭和37年(1962)に明治初期から第二次世界大戦の終戦までの日本のデザイン界の歴史を「日本の近代デザイン運動史」と題して、大勢の執筆者の協力を得て雑誌『デザイン』の1月号(図9)から12月号まで一年間連載⁽²⁶⁾したさいの資料などを土台にしてまとめられたという。「あとがき」で氏は、この書を、「日本のデザイン運動に対する私なりの一つの決算書とってよい」と記しているが、先に記したように、今日では、個人の決算書をこえて、第二次世界大戦後の日本のデザイン史研究のひとつの決算書となっている。

出原氏の著書の発行以前には、日本のデザインの歴史に関しては、通史的な記述として、小池新二氏が助言者となり、阿部公正氏が執筆者となって、昭和33年(1958)の日本貿易振興会(Japan Export Trade Promotion Agency/JETRO)設立の直後に、JAPANESE DESIGN IN PROGRESS⁽²⁷⁾(図

10) という表題で英文によって発行されたものがあげられる。しかしながら、戦後昭和期にあらわれたデザインについての歴史や理論についての記述の多くは、出原氏が「あとがき」で指摘したように、欧米のデザインを主として取り扱うものであった。その典型的なものとしては、昭和40年(1965)に発行された勝見勝氏の『現代デザイン入門』⁽²⁸⁾があげられよう。同じ年に発行された小池新二氏の『デザイン』⁽²⁹⁾も、明治維新以降の日本のデザインの歴史について、ウィーン万博への日本の参同から説き起こしているものの、基本的には、勝見勝氏の著書と同じように、モダン・デザインの理念の重要な啓蒙書という性格が強い。

このようなモダン・デザインの理念を日本において啓蒙してゆくという姿勢は、昭和32年(1957)に相前後して発行された、勝見勝・前田泰次の両氏の翻訳によるハーバート・リードの『インダストリアル・デザイン』⁽³⁰⁾と白石博三氏の翻訳によるニコラス・ペヴスナーの『モダン・デザインの展開：モリからグロピウスまで』⁽³¹⁾の両書にみられるモダン・デザインの理論や歴史についての記述にもとづいているとってよい。1930年代に英国で発行されたリードとペヴスナーのそれぞれの原著は、阿部氏が、デザインについての理



図10



図11

論と歴史についての系統的な記述のはじまりと評価するものである⁽³²⁾。出原氏の記述も、これら両著の記述の延長上に位置づけられ、この流れが、第二次世界大戦後の昭和期、とりわけ昭和34年（1959）の意匠法改正前後からの日本のデザインの理論と歴史についての記述の主流となっていたのである。

この流れをおおきくとらえようとするさい、試みに小池新二氏・勝見勝氏・阿部公正氏・出原栄一氏の四氏の記述を中心にたどるとするならば、そこには昭和戦前期から昭和戦後期にいたる日本のモダン・デザインの美学を探求したひとつの系譜を確認することができる。それは、また、サンフランシスコ平和条約締結直後の昭和28年（1953）に発行された『工芸ニュース（Industrial Art News）』⁽³³⁾（図11）において「世界のインダストリアル・デザイン運動の50年（Fifty years of the Industrial Design movement in the World）」と題された特集記事にまとめられている記述からの展開とみることもできる。

この特集号に寄稿された論考からは、カタカナ表記の「インダストリアル・デザイン」という表現が、同じくカタカナ表記の「モダン・デザイン」という表現と、ほとんど同義であったことが読みとれる。そこには、鈴木道次氏の北欧の動向についての論考や阿部公正氏のアメリカの動向についての論考が代表するように、手工芸品から工業製品、そして建築にいたるまでのデザインを、進歩しつづける技術にもとづく実際の生活とのかかわりのなかから総合的にとらえようとする立場が貫かれていることがみいだされる。

この立場は、昭和34年（1959）に創刊され昭和52年（1977）に休刊となった雑誌『デザイン』の「編集方針のバックボーン」として勝見勝氏が掲げた「デザインの総合（the integration of every field of design）」を目標とする立場⁽³⁴⁾とも重なっている。それは、日本のデザインの歴史についての出原氏の記述にも読みとれるし、昭和期の日本におけるデザインの歴史と理論についての記述を特徴づけるひとつの重要な立場だといえよう。

平成13年（2001）にデザイン史フォーラムの編集のもとに発行された『国際デザイン史』

にも、「デザインの総合」という立場は継承されており、さらに先に指摘したように、双方向的な国際的交流という観点からのデザイン史の記述が特徴となっているのである。それは、出原氏が、平成4年（1992）に、その著書の増補版において加筆した日本のデザイン運動の国際的貢献の問題、具体的には、明治期に日本に滞在したヘルマン・ムテジウスやクリストファー・ドレッサー、そして昭和初期のブルーノ・タウトらを通じてのヨーロッパのデザイン運動への日本の影響についての実証的な研究の問題を扱うさいのひとつのアプローチをしめしている。さらに出原氏が指摘する、昭和39年（1964）の東京オリンピックにおけるシンボルマークの国際語としての波及効果に関する国際的な検証の問題や、1970年代から1980年代にかけて進展した日本の自動車・家電製品などの海外輸出品にみられる「志向先に合わせたデザイン」に関する歴史的な検証の問題へのアプローチもしめしてもいよう。

『国際デザイン史』への筆者の寄稿ならびに、これにつづくデザイン史の研究は、おおきくは、以上のような出原氏の日本デザイン史についての記述が属する流れに連なりながら、応用美術に積極的に焦点を合わせ、応用美術の思想をモダン・デザインの理念と等しく評価してゆくという観点に立つものである。

4 応用美術からデザインへ

先に指摘した小池新二氏・勝見勝氏・阿部公正氏・出原栄一氏とたどるときの記述、具体的には、昭和18年（1943）に発行された小池新二氏の『汎美計画』⁽³⁵⁾から平成元年（1989）に発行された出原栄一氏の『日本のデザイン運動』にいたる記述のなかで、デザインの歴史は、「応用美術からデザインへ」という表現でとらえられているとみることができる。そして、出原氏の著作をふくめ、それぞれの戦後昭和期に発行された代表的な著作、先に指摘した『現代デザイン入門』、『デザイン』、そしてこれらにつづく阿部公正氏の『デザイン思考』⁽³⁶⁾の記述からは、応用美術が、モダン・デザインによって否定され、

克服されるべきものとしてとりあつかわれていることが容易に読みとれる。

すなわち応用美術の思想は歴史主義あるいは折衷主義によって特徴づけられており、これはモダン・デザインの理念を特徴づけている合理的な機能主義によって否定され克服されなければならない、モダン・デザインの理念についてみれば、その起源は、世紀転換期のアールヌーヴォーやセセッションの運動に影響を与えたモリスのアーツ・アンド・クラフツ運動にもとめられるというのである。

しかしながら、明治・大正・昭和・平成とつづく日本のデザインの歴史を、デザインの総合という観点とともに国際的交流という観点をもって記述しようとするとき、応用美術について、とりわけその思想の意義について積極的に評価しなければならないというのが、筆者の立場である。1980年代に、美学者の今道友信氏は、「現代美学の課題と展望」と題した論考⁽³⁷⁾のなかで、「デザインの問題は、思想運動として考えてみなければならないだろう」と記したうえで、つぎのように指摘した。

「かつて美学的な思想としての機能主義がデザインをリードした時代があった。いまはしかし、機能とは違う価値を求めなければ、インダストリアル・デザインは意味を失うであろう。」

この指摘を念頭におきつつ、筆者は、機能主義がデザインをリードする以前の時代では、応用美術の思想が、多様な技術的進歩に美的秩序を与えるという美学的な思想として、デザインをリードしていたと考える。筆者の研究⁽³⁸⁾にもとづけば、応用美術の思想は、明治6年(1873)のウィーン万国博覧会への日本の参同をきっかけとして、ヨーロッパから日本に導入され、明治21年(1888)に制定された意匠条例にも反映していたことがあきらかになった。この観点から、筆者は、明治から平成にいたる日本のデザインの歴史をみるとき、意匠条例の制定と、その後の意匠法の変遷をてがかりにして、いくつかの画期となる変化が指摘できると考える。

明治21年(1888)に制定された意匠条例は、デザインに関する日本で最初の法律であるが、明治32年(1899)に工業所有権に関す

る国際条約との関連から廃されて、意匠法となった。この意匠法が、明治42年(1909)に根本改正され、そのさい条文のなかに以前にはみられなかった「工業的意匠」という新しい表現が使われた。これは、当時、英語の industrial design を意味するものであった⁽³⁹⁾。

第一次世界大戦後の大正10年(1921)に根本改正された意匠法では、著作権法における「美術的考案」との区別を明確にするために、意匠が「工業的考案」と規定されることとなった。昭和3年(1929)の意匠法の根本改正のための会議⁽⁴⁰⁾では、「美ノ実用化」の認識が表明されたが、このときは改正にはいたらなかった。その後、昭和11年(1936)には、年間意匠登録出願件数が意匠条例制定後の最高水準に達したが、昭和18年(1943)から昭和21年(1946)まで、工業所有権戦時特例によって意匠登録が停止されることとなった。

昭和21年(1946)に意匠登録が再開された後、意匠登録出願件数が戦前の最高水準に回復するのは、昭和30年(1955)以降のことであり、大正10年(1921)意匠法の抜本的な改正は、昭和34年(1959)におこなわれた。この改正にいたるさいに、「意匠は機能に従う」と説明がなされ⁽⁴¹⁾、意匠法の条文に、意匠が視覚にもとづくものであることが明記されたのである。さらに平成6年(1994)の「意匠制度ラウンドテーブル」の提言⁽⁴²⁾において、「デザイン」という言葉が多く創作活動を総称するものであることが表明された。この「意匠制度ラウンドテーブル」の提言が、その後、平成18年(2006)の重要な部分改正に方向性をあたえることとなった。

以上のような意匠法の変遷のなかで、意匠や図案をめぐる記述、いかえれば日本におけるデザインをめぐる記述も変化し、その記述から読みとれるデザイン概念も変化している。その変化に着目するならば、明治期の意匠条例の制定から平成期の「意匠制度ラウンドテーブル」にいたるまでに、下記のように、おおきく五つの特徴的なデザインが重なりをもちながら推移していった過程が指摘できよう。

I：歴史主義様式のデザイン

II：新様式のデザイン

- Ⅲ：経済的デザイン
- Ⅳ：機能主義的デザイン
- Ⅴ：多元主義的デザイン

さらに上記のⅠからⅤまでのデザインの移り変わりについて、四つの特徴的な追求過程があったと考えられる。すなわち、ⅠからⅡへの変化には、「様式的な一貫性の追求」がみられ、ⅡからⅢへの変化では、「有機的な統一性の追求」がみられる。ⅢからⅣへの変化には、「造形的な効率性の追求」がみられ、ⅣからⅤへの変化には、「造形的な多義性の追求」がみられる。

このようにみると、ⅠからⅡをへてⅢにいたる過程では、応用美術のデザイン思想が指導的役割をはたし、ⅡからⅢをへてⅣにいたる過程では、応用美術への批判をともなった、機能主義にもとづくモダニズムのデザイン思想が長期的にわたって指導的役割をはたしたといえよう。ⅣからⅤへの過程では、いわゆるポストモダニズムのデザイン思想が台頭してきたとみられよう。

いうまでもなく、以上のことがらについては、意匠条例制定以前から平成期の今日にいたるまでの歴史的事項についての実証的な研究が必要である。そのあしがかりとして、出原氏の著書にみられる時代区分をみておきたい。出原氏は、明治維新・第一次世界大戦・第二次世界大戦・戦後経済の高度成長などを画期として、日本のデザイン運動について、大きく四つの時代区分を提案している。

それによれば、1870年前後から1915年前後にいたる、明治の開国から第一次大戦までの第一期が、「産業運動の時代」、1915年から1945年にいたる、ふたつの世界大戦には含まれた第二期が、「芸術運動の時代」、1945年から1960年にいたる、第二次世界大戦の直後から高度成長期までの第三期が、「機能主義デザインの時代」、1960年代以降の第四期が、「商業主義の時代」となる。

このような出原氏の時代区分に、筆者の提案する五つのデザインの変遷過程を、年代をもとにして照らしあわせれば、おおよそ、ⅠとⅡのデザインは、第一期に対応し、Ⅲが第二期に、Ⅳが第三期に、Ⅴが第四期に対応することとなる。しかしながら、出原氏が「産業運動の時代」との名称をあたえた第一

期については、この時代にみられるさまざまな動向を、明治32年(1899)と明治42年(1909)の意匠法の改正に照らせば、より詳細に検討しなければならないと思われる。また「芸術運動の時代」とまとめられた第二期の動向についても、大正10年(1921)の意匠法の改正に照らしての詳細な検討が必要となろう。

一例をあげるならば、明治44年(1911)にイタリアのトリノ市で開催された万国博覧会への日本の参同については、当時の日本における建築・家具をふくむ商品デザインに関して、アールヌーヴォーならびにセセッション様式模倣からの脱却が主張されるきっかけとなり、安田禄造の「経済的工芸」の主張の普及の重要な下地となったとみられる⁽⁴³⁾にもかかわらず、出原氏の著書から『意匠制度120年の歩み』にいたるまでの日本のデザインの歴史をあつかった研究書において、一切言及されていないことからわかるように、ほとんど研究がなされていないのである。このような事例は、ほかにもあると考えられ、あらためて、日本のデザインの歴史に関する第一次資料を精査する必要があるだろう。

以上のような検討がもとめられる対応関係からは、デザインの歴史において、機能主義の考えがきわめておおきな意義を有していたこと、いいかえれば、機能主義を中心にして、デザインの理論と歴史を記述し理解してきたことがあらためて知られる。平成期のデザイン史研究は、デザインの歴史を「応用美術からデザインへ」とみると、機能主義以前のデザイン思想である応用美術を正當に評価し、機能主義以後の、いわゆるポストモダニズムのデザイン思想を明確にする基礎概念についての議論によって、もっともよく特徴づけられるといえよう。そのような記述をなすこと、それが、今後の筆者のデザイン史研究の課題であることを指摘して本稿を閉じる。

註

- (1) 意匠学会 第55回大会 発表要旨集
- (2) 『デザイン学研究』第72号 平成元年(1989)
- (3) 工業デザイン編集委員会『工業デザイン全集 1 理論と歴史』日本出版サービス 昭和58年(1983) pp.167-191

- (4) 文部科学省著作教科書『高等学校用 デザイン史』東京電気大学出版局 平成17年(2005)「まえがき」によれば「デザイン史」の内容が広く解釈され、「造形の歴史の総合的な理解」を得ることが目的とされている。編集協力者は以下の各氏。

鍵和田務・金井充・君島昌之・日野永一

審査協力者は以下の各氏。

君島昌之・立部紀夫・日野永一・宮島久雄・藪亨

この教科書は、高等学校の専門学科において開設される教科としての「工業」に属する科目である「デザイン史」のために文部科学省によって編集されたものである。高等学校学習指導要領によれば、この科目の目標は、「造形とデザインの歴史を理解させ、実際に創造し鑑賞する能力と態度を育てる」ことである。科目の内容は、以下のとおり。

- (1) 日本のデザイン
 - ア 古代の生活と造形
 - イ 中世の生活と造形
 - ウ 近世の生活と造形
 - エ 近代のデザインと生活
- (2) 西洋のデザイン
 - ア 古代の生活と造形
 - イ 中世の生活と造形
 - ウ 近世の生活と造形
 - エ 近代のデザインと生活
- (3) 現代のデザイン
 - ア 第二次世界大戦後のデザイン
 - イ 現代デザインの展開

指導要領によれば、内容の(3)については、「日本のデザイン活動の国際的な広がり及び日本のデザインに影響を与えた諸外国のデザインなどを扱い、現代デザインの国際的な動向について理解させること」となっており、デザインの国際交流への視点が強調されている。
- (5) 阿部公正監修『世界デザイン史』美術出版社 初版平成17年(1997)
増補新装版平成24年(2013)
執筆者は、阿部公正・神田昭夫・高見堅志郎・羽原肅郎・向井周太郎・森啓の各氏である。
- (6) 『BT:美術手帖』3月増刊号 Vol.46, No.686, 平成6年(1994)
- (7) 藪亨「デザイン史の現状と課題」『デザイン理

論』No.42 平成15年(2003) pp.78-80を参照されたい。

- (8) 意匠学会会報. No.70.『デザイン理論』第59号. 2011. pp.136-7
- (9) John Walkerによれば、「デザインの歴史(history of design)」という表現は、学問としての「デザイン史(design history)」の研究対象を指しており、はっきり分けて考えなければならないとされている。

John Walker, Design history and the history of design, Pluto Press, 1989.p.1. 邦訳は以下のとおり。栄久庵祥二訳『デザイン史とは何か』技報堂平成10年(1998)

日本語においては、「デザインの歴史」という表現と「デザイン史」という表現が明確に区別されないで使用されることが多い。先の高等学校学習指導要領にもとづく教科としての「工業」の科目である「デザイン史」は、「history of design」と英訳される場合があるが、科研費の細目の「デザイン史」は、「design history」と英訳されている。

科目としての「デザイン史」の英訳については以下を参照。

「高等学校学習指導要領に示された教科「工業」の科目名の英語訳(案)」

<http://www.jikkyo.co.jp/download/detail/71/9992655228>

科学研究費助成事業の審査に係る「系・分野・分科・細目表」における「デザイン学」のキーワードにしめされた「デザイン史」の英訳は、「design history」である。

日本語は下記を参照。

http://www.jsps.go.jp/j-grantsinaid/02_koubo/data/25keyword.pdf

英文は下記を参照。

http://www.jsps.go.jp/j-grantsinaid/03_keikaku/data/h26/1/h26_koubo_08_e.pdf

- (10) Locating Design 7-9 Sept. 2005. The Design History Society Annual Conference.
筆者の発表は以下のとおり。
AMAGAI Yoshinori, London-Vienna-Tokyo: The art and industry movement from the West to the Far East in the 1870s.
- (11) デザイン史フォーラム編『国際デザイン史—日本の意匠と東西交流—』思文閣出版 平成13年(2001)

- (12) ICDHSについての情報は、以下のホームページに、過去の開催地やICDHS Boardをふくめて詳しく紹介されている。
<http://www.ub.edu/gracmon/icdhs/>
 また、設立当初のデザイン史デザイン学国際会議のデザイン史の地政学的アプローチの精神については、アンナ・カルヴェラが以下の論文において論じている。
 Anna Calvera, The ICDHS&DS Barcelona'1999 and Design History in Spain. "Art, Communication and Design: Intenational Forum Proceedings". 2005. pp.43-48
- (13) Mind the Map 3rd International Conference on Design History & Design Studies: Abstract. Istanbul 9-12 July 2002.
 筆者の発表は以下のとおり。
 Yoshinori Amagai, Reconciderring the Establishment of the Kobu Bijutsu Gakko: What did Bijutsu mean in the 1870s of Japan?
- (14) Yoshinnori Amagai, The Kobu Bijutsu Gakko and the Beginning of Design Education in Modern Japan. Design Issues, Vol.19, No.2. MIT Press. 2003. Pp.35-44
- (15) Another Name for Design: Words for Creation. ICDHS 2008 Osaka.Proceeding of the International Conference of Design History and Design Studies.
 筆者の発表は以下のとおり。
 The First Japanese Design Regulations (Ishojorei) and the Idea of Applying Art to Industry in the Japan In the 1880s.
- (16) Design Frontiers: Territories/ Concept/ Technologies. ICDHS 2012 8th Conference of the International Committee for Design History & Design Studies. Abstracts Book.
 筆者の発表は以下のとおり。
 Japanese industrial design concepts in the transition from the nineteenth century to the twentieth century: Special reference to the Japanese industrial design educators Hirayama Eizo (1855-1914) and Matsuoka Hisashi (1862-1944).
- (17) 以下のホームページを参照。
<http://dhwj.org/jp/sympo/index.html>
- (18) 藤田治彦「第8回デザイン史デザイン学国際会議(2012年9月サンパウロ開催)報告」『デザイン理論』第62号 2013. pp.96-7
- (19) 出原栄一『日本のデザイン運動—インダストリアル・デザインの系譜—』ぺりかん社 平成元年(1989)、増補版 平成4年(1992)
- (20) 藤田治彦『現代デザイン論』昭和堂 平成11年(1999)
- (21) 竹原あき子・森山明子監修『日本デザイン史』平成15年(2003)
- (22) 長田謙一・樋田豊朗・森仁史編『近代日本デザイン史』美学出版 平成18年(2006)
- (23) 森仁史『日本<工芸>の近代—美術とデザインの母胎として—』吉川弘文館 平成21年(2009)
- (24) 特許庁意匠課『意匠制度120年の歩み』コンパクト・ディスク版 平成21年(2009)
- (25) 工業技術院産業工芸試験所編集『産業工芸試験所30年史』工業技術院産業工芸試験所 昭和35年(1960)
- (26) 雑誌『デザイン』の連載は以下のような章立てになっており、10章と14章を除いて、それぞれのテーマについて出原氏による記述あり、それにつづいて、複数の執筆者による回想・解説が掲載されている。
 1月号「はじめに」 pp.33-35 「1：デザイン教育の先き駆け」 pp.35-36
 2月号「2：デザイン運動の準備期」 pp.29-32
 3月号「3：デザイナー・グループの誕生」 pp.31-32
 4月号「4：国立工芸指導所の設立」 pp.34-35
 5月号「5：商業美術運動」 p.43
 6月号「6：室内装備をめぐる」 pp.42-43 「7：政府の工芸振興策」 p.47
 7月号「8：DWB—バウハウスの影響」 pp.27-28
 8月号「9：タウトおよびペリアンの足跡」 p.43
 「10：続・美校と高等工芸」
 9月号「11：続・商業美術運動」 p.42
 10月号「12：「工業品美化」運動」 pp.32-33
 11月号「13：戦乱の中野新しいゼネレーション」 pp.27-28
 12月号「14：戦争末期」「おわりに」 p.51
 第二次世界大戦後のデザイン運動については、平成2年(1990)に発行された工芸財団の編集による『日本の近代デザイン運動史：1940年代～1980年代』（ぺりかん社）がある。

- この図書の編集には出原氏も加わっていた。
- (27) Kimimasa Abe, Shinnji Koike: Japanese design in progress, Japan Export Trade promotion Agency. nd.
- (28) 勝見勝『現代デザイン入門』鹿島出版会 昭和40年(1965)
- (29) 小池新二『デザイン』保育社 昭和40年(1965)
- (30) 勝見勝・前田泰次訳『インダストリアル・デザイン』みすず書房 昭和32年(1957)
- (31) 白石博三訳『モダン・デザインの展開：モリスからグロピウスまで』みすず書房 昭和32年(1957)
- (32) 阿部公正『BT：美術手帖』3月増刊号 Vol.46, No.686, 平成6年(1994) p.8
- (33) 『工芸ニュース』昭和28年(1953) 1月号 第21巻 第1号
- 戦前については、以下のような執筆者が寄稿していた。
- イギリス：勝見勝 (JIDA 顧問)
- フランス、ベルギー、オランダ：滝口修造 (美術評論家)
- ドイツ：蔵田周忠 (建築家)
- 北欧：鈴木道次 (JIDA 会員)
- アメリカ：阿部公正 (横浜国立大学学芸部講師)
- 戦後については、小池新二氏がアメリカとヨーロッパを中心に寄稿していた。
- 戦後の工業デザイン—国際的展望—：小池新二 (千葉大学工学部工業意匠学科教授、JIDA 顧問)
- 日本については豊口克平氏が寄稿していた。
- 日本のインダストリアル・デザインの歩み：豊口克平 (IAI)
- (34) 『デザイン』第1号 昭和34年(1959) p.10
- (35) 小池新二『汎美計画』アトリエ社 昭和18年(1943)
- (36) 阿部公正『デザイン思考』美術出版社 昭和53年(1978)
- (37) 今道友信「現代美学の課題と展望」今道友信編『西洋美学のエッセンス 西洋美学理論の歴史と展開』ぺりかん社 平成6年(1994) p.448
- (38) 天貝義教『応用美術思想導入の歴史—ウィーン博参同から意匠条例制定まで—』思文閣出版 平成22年(2010)
- (39) 天貝義教「明治末期から大正初期の日本における工業意匠概念について—明治四十二年(一九〇九)意匠法を中心に—」『美学』第63巻第1号 平成24年(2012) pp.85-96
- (40) 『工業所有権法規改正ニ関スル会議 意匠法之部』工業所有権参考資料センター図書番号1
- (41) 特許庁『工業所有権制度改正審議会答申説明書』昭和32年(1957)
- (42) 制度ラウンドテーブル事務局『魅力ある意匠制度の確立に向けて』平成7年(1995)
- (43) 天貝義教「明治末期のオール・ヌーヴォーならびにセセッション様式模倣に対する平山英三の批判について—大正元年開催第六回商品改良会史出品講評を中心に—」意匠学会第55回大会発表要旨集